

津田左右吉博士小論

——家永三郎氏の所説によせて——

はしがき

木村時夫

今日、津田左右吉博士の名はかなり世間に知られている。しかしその有名さは、主として戦前、その上代史に関する一連の著作が、皇室の尊嚴を冒瀆するものとして告訴された学問研究や自由な言論に対する弾圧の受難者としてであり、また戦後における文化勲章の受賞者としてである。今の高校用の日本史の教科書で、津田の名をのせていないものは一冊もない。

またその研究の内容についても、日本の神話といわれる記紀の神代の部分が、日本の建国の歴史事実を伝えるものではなく、皇室の起源とその日本統治の正当性を説くために、宮廷の知識重臣層によって作られた説話であるという説、あるいは、聖徳太子の十七条憲法が太子の手になるものではなく、大化改新以後に作られたものであるという、いわゆる偽作説、また『万葉集』の中の地方農民の作といわれるものが、実は中央の知識人の手になるものであるとする見解、および東洋という呼称は、地理的には成立し得ても、文化的には成立し得ないという主張等々は、津田の

学問的業績の一端としてよく知られている。

津田の名は戦前の不幸な事件をきっかけとして、さらに戦後における彼に対する評価の複雑な変化もあって世間に知られるようになった。しかしその有名なほどには、津田の著作は読まれていない。それは津田が戦後の一時期を除いては、一般的もしくは啓蒙的といわれる著作ないし文章を発表したことがなかったからである。すなわちその業績はすべて専門的著作もしくは学術的論文として発表されたものであるから、一般の眼にふれることがなかった。戦前、新書判として比較的よく読まれた『シナ思想と日本』も、すでに岩波講座に掲載されていた二つの論文をあいう形で一本にしたものであった。したがって津田の業績を云々する者も、その多くは津田の実際の著作にふれることなく、単なる風評にもとづいて行なう場合が多い。

最近よく専門家の間で、津田の業績をのり超えてということがいわれているが、学問の眞の発展のためには、なんびとの業績であっても批判すべきは批判し、のり超えるべきところをのり超えることの必要なことはいうまでもない。しかしその場合、学説の結論の部分だけを取上げ、その結論が導き出される過程、すなわち学問的方法や思考の様式を無視することがあってはならない。さらに研究者がそのテーマに取組む姿勢、および得られた結論によって何をい want とするか、の正確な理解がなければならぬ。なぜならば、一研究者の学問研究の態度も、その業績も、研究者の人、なかんづく思想と切離しては考えられないからである。

津田の地域的にも時代的にも、そうして分野においても、多彩な業績は、たとえその中にのり超えられるべきものがあるとしても、そのためにとられた研究方法とともに、それが学界に寄与したことは一つの動かすべからざる歴史事実である。したがってそのような学問的方法と業績とが、津田自身の中においてどのように形成されたのか、また

それが日本の学問研究の歴史においてどのような意義をもつかを明らかにすることは、それ自身大切な研究である。さらにいえば、津田の人物や業績に関心をもちながら、その機会をもたない、いわゆる一般知識人に対して、その全貌を明らかにすることが大切である。しかしそれは難かしいことではあるが、あくまでも事実に立つての正しい全貌でなければならぬ。正しくなくとも、ひとたびつくられたイメージは、その後の人々のイメージを左右するからである。

最近、家永三郎氏が『津田左右吉の思想史的研究』と題する大部の書物を世に問われた。私は最初にも記したように、津田の業績とその意義とを日本の学問研究の歴史的展開の中で明らかにすること、および津田自身の思想的展開に即してその業績を整理してみることの重要性を感じている。戦後かなり早い時期に家永氏がそのことに着手され、その成果を読み、部分的には意見を異にするところはあるが、その意図と努力とに対してはひそかに敬意を表していた。家永氏の同書は、その当時の論文も収録されているが、氏がそれ以後書き続け、今度の新刊を世に問おうとされた意図は、氏が最初に津田の業績の思想史的意義の研究に着手した当時とは甚だ異なるものがあり、私がいわゆる津田研究の意義と考えるものともいじめるしく異なるものである。

それは氏が同書の中で、

それほどまでに傾倒した人が、戦後の動きの中でいつの間にか全く別世界（思想の次元での）の人となって行くのを見なければならなかったのは、個人的心情からすればまことに忍びないところであったけれど、同時にこれを機会として、津田の業績を今までのように、自分の学問の指針としてではなく、客観的な史的認識の対象としてつき放してとらえてみようという気持を起させることもなった。（同書序文の11 以下同じ）

と記しているのでも明らかである。

一読しての率直な感想をのべるならば、家永氏の今度の書物は、津田の学問的業績を日本の思想史上に位置づける学問研究ではない。津田の業績を戦前と戦後で区別し、戦後のそれは学問的業績というより、時事評論の類を主とするものであり、しかもそれらに戦前の所説との部分的一貫性をみとめながら、それらが戦後においてしめる役割を、戦前の右翼思想家や保守的な国体論者のそれと同一視し、もっぱら津田を天皇制擁護や反共主義を呼号する反動思想として告発するものようである。氏が少なくとも戦後の津田を批判する態度の中で、学問というものの、思想というものの、学者というものの、および歴史の見方、扱い方等々を、どのように考えておられるのか、それがかつて傾倒して止まなかったという、津田の思想や学問とどこで結びつくのか、また氏の理想とする世界とはどのようなものなのか、あるか、などについても多くの疑問をいだかざるを得なかった。

家永氏が同書の中で記した、数々の津田批判にもかかわらず、その読者の中にはおのずから氏とは異なる津田左右吉像を描くもののあることを信ずるが、「戦前には正統的史観への勇敢な挑戦者であり戦後には戦後の科学的史学を敵視し『皇国史観』の復活を強行しようとする権力のイデオログに化した思想家津田の悲劇」(598)というように津田像が、そのまま読者の津田像となることをおそれるので、以下私の読後感をもとにして、気付いたことを記してみたい。

一 津田批判の矛盾

家永氏は津田の業績を展望するに先立って「津田の思想の形成過程」という一編をかがげ、津田の幼少期から青年

期にいたる伝記的研究を行なっている。一個の人間の思想の展開を考察する場合の周到な用意というべきである。しかし家永氏が津田の幼時について指摘している中に、士族の出であるということがある。そうして津田が士族の出であるが故に「彼の終生かわらぬ孤高の精神、善くいえば衆愚に雷同せず独自の思想を堅持する強烈な主体精神、悪くいえば大衆の切実な要求を必ずしも身をもって同感できない無意識的独善性が、このような生活条件によって培われたように想像される」(6)とするのはどうか。筆者も、生前の津田が客と対座して、かつて膝をくずしたことの無いことや、晩年、和服で通院する場合にも、袴をつけ、決して着流しで外出することのなかったことなどを知っている。しかし平常の津田はそういう風儀を人に強制することも、また後進の者に対して道徳的な訓戒を加えることもなかった。津田自身、幼時の思い出の中で「武士ふうの教訓やしつけなどは少しもうけなかった」といっているのが事実であろう。氏の前記引用文の表現は、氏の描く戦後の津田像を前提とした臆測であると思われる。

なお、氏は少年時代の津田が『國民之友』や『日本人』などの雑誌や、改進黨系の新聞である『岐阜日日』は購読したが、自由党系の『濃飛新聞』を購読しなかったことを指摘し、「それは津田の政治思想を生涯にわたり規定する消極的要因となったと思われる」(18)といい、また「自由民権運動の洗礼をうけなかった津田には幼少期にすでにそれを強く胸に刻印された木下尚江や幸徳秋水らの数年の先輩に比べればたしかに政治意識の上では大きな欠落面があったことは否定しがたいと思う」(51)ともいっているが、一時代の急進思想の影響を人が受けるかどうかは価値判断の外で、ある思想の影響を拒否するのとも人の見識であり、政治意識が革新思想に対する感受性という観点からのみはかられるべきものでないのであって、いかがかと思われる表現である。

しかし一面、家永氏は青年期の津田が各分野の書物を精力的に消化していった状態を、その日記の中から仔細に再

現し、とくに「津田の教養の蓄積が、受動的な文化財の無批判的受容ではなく、常に強固な個性的批判力に支えられた主體的立場を堅持した上での吸収享受であったことが知られ、津田史学をもっとも鮮やかに特色づける強烈な批判的精神が、その教養蓄積過程において逸早く発揮されていたことを確証しうる。」（中略）後年の津田が、狭大な領域と無味乾燥で没主體的批判と実証とに終りがちなアカデミズム史学に見られぬ広い視野と豊かな人間精神の内部への追体験と峻烈な主體的批判とを具えて出現したのは、実にこのような青年期の教養蓄積を前提とすることによってのみ可能だった（42）と、その主體的批判精神を高く評価している。

しかし、その同じ著者が、その書物の後半においては、津田のこのような主體的批判精神を、「人類普遍の真理を拒否する民族主義、個人の経験にのみ拘泥する経験主義、超越的なものへのかわりを拒否する内在主義といった、平板で浅薄な現実追隨思想への落とし穴に陥る危険性に通じており」（284）と批判している。この文章は同書の第六編、「戦後の津田の思想の変貌」の第二章に記されており、先の引用文より晚い時期に書かれたものと思われるが、何よりも家永氏自身の思想に大きな変化のあったことが注意される。

二 思想の本質と学者の在り方

家永氏は津田がその青年時代、文学、芸術、哲学関係の洋書をよくひもといていることをも考証し、「大正期の津田が人類的普遍妥当性を価値基準とすることにより日本の歴史を批判的に再構成する壮大な業績を築き上げることができたのも、青年時代以来の、形而上学的思索をふくむ外国思想を深く学んだからでこそあれ、それなしに津田史学の輝かしい成果はありようがなかったのではなかろうか」といっている。たしかに津田は青年時代に各分野にわたる

洋書をよく読んでいる。それは津田の業績が主として日本や中国に関するものであるだけに、人々の想像を絶するものがある。しかし津田がその数多くの洋書から得たものは、氏のいうように「外国思想」だったのであろうか。一個人の思想というものは知識のように他から注入されたり、読書だけから得られるものなのであろうか。それは氏もいうように、まず個人の主体性や個性があり、その主体的批判精神によって取捨され、それが個人の思想を培養することであっても、他の思想がそのままに移植されるということはあるまい。氏は戦後の津田の思想の変化についてのべる時、『津田文庫目録』により、津田の所蔵した洋書の中で、文学関係の二八二部に対し、社会、政治、経済が合計二五部であることや、一九三〇年代以降の洋書の少ないことを指摘し、「津田の社会科学的教養の欠乏は覆いがたく、それが社会的感覚のまだ鋭かった昭和初年までは大きな欠陥を露呈しませんでしたのであるが、戦後の反マルクス主義感情の異様な昂進に伴ない、一挙に表面に現われてきたものと考えることが出来る」⁵⁷³⁻⁴ といっている。ここにも氏の津田の業績に対する評価が、その前と後とは著しく異なることが注意される。しかしより根本的には、洋書を読むことの少なくなったことが、津田の思想を枯渇させたという観点である。かつて家永氏の質問に答えて「西洋の形而上学の歴史を学んで、それに何かを付け加えるという形で形而上学を研究すべきではないと思ふ」⁵⁸³⁻⁴ といっている、津田の態度こそが、思想の本質を明らかにしていると思う。外国の書物からの絶えざる新知識の補強なしには、日本の学問が完全たりえないという観点こそが問題なのである。

なお、氏は津田の伝記的研究の中から、津田が終始書齋の人、研究室の人であったことを指摘している。事実、津田は白鳥庫吉の主宰する満鉄の調査室に籍をおいた以外、生涯の大半は教職にあり、それも早大を辞した昭和十五年以後は、全く書齋の人であった。そうしてその教職、研究室、書齋の中から津田の膨大な業績が完成されたことも事

実である。しかし、氏がそのような津田の生涯を、直接に生きた社会の動きに身を投じ、泥にまみれて歴史の実態を体得するのではなく（7）とか、「津田の社会的関心は終始新聞雑誌等の活字から得られる知識を素材としての関心にとどまり、研究室外の動きを肌で感じとるに足りる体験は終生皆無にちかかった」といい、そのことが「思想家としての津田にとり顕石となるべき致命的弱点であった」（62）といわれると、真の研究者、学者といわれるものの在り方を改めて考えさせられざるをえない。学者の在り方についての筆者の所見までものべる必要はないと思うが、昨今の氏の活動が、反射的に脳裏に浮ぶのをいかんともしがたい。

二 単純なラベルづけ

さらに、以上との関連において、家永氏のつぎの一文も検討されなくてはならない。

津田史学の基盤をなす思想が、結局は書齋の人の立場を超えない制約を帯びていたことは否定しがたく、民間史学とアカデミズム史学との相互補完、高次の統一を実現したといっても、民間史学を裏づけていた社会的実践の契機が津田史学では必ずしも前進的に発展させられていない点は、津田史学の特質を明らかにする上でやはり見落してはならないところであろう。（88）

まず第一に、氏のいう民間史学という用語が、社会的実践の有無をもって規定されているということである。これに対するアカデミズム史学とは、それとはいっていないが、考証に終始する類の歴史をさすのであろう。そうして氏の筆致によれば津田が民間史学として出発しながら、アカデミズム史学との「相互補完」と「高次の統一」とを一心に実現したとみるようであるが、津田にとっては関係のない、むしろ迷惑な表現である。なぜならば津田が目指した

ものは、事実にもとづいて過去の真実を明らかにすることで、それは決して「大正デモクラシー期の批判的精神の高揚を背景」(245)にしたものでもなければ、反体制的な社会的実践でもなかったからである。したがって、津田の研究が民間史学のワクの中に入れられるべきでもないし、津田がその研究のためにとった学問的方法も、また単なる文献学的方法でも考証学的それでもなく、したがって氏のいう、アカデミズム史学のワクに入れられるべきでもないからである。

第二には、ここにも「津田史学」「民間史学」「アカデミズム史学」等の用語が見られるが、氏の書物にはこの他、「正統的史観」「異端的史学」「科学的史学」等々の用語がしばしば出てくる。筆者はこのようなワクというか、ラベルというか、一つ概念をもって簡単に人の歴史研究を律し去る、氏の態度に賛成できない。世には自己の歴史観なり研究の態度なりを表明している者もあろうが、多くはそれぞれが正しいと思う学問的方法によって研究しているであって、批判はそれが真に学問的であるか否かを中心とすべきであって、軽々に正統的、異端的等のラベルをはるべきではない。ことに「津田史学」などという、津田に限られる独特な研究方法であるかのような表現は、「柳田史学」などというワクづけとともに、さけるべきではないか。津田と柳田との研究は、その対象も方法もちがっている。しかし、過去における真実を求めて、学問的に厳密であろうとする態度、すなわち学問的方法においては同一であるからである。「津田史学」などというと、津田に独特な研究方法であり、普遍性のない学問的方法であるとうけとれよう。既成のワクや概念をもって過去の歴史に対さないのが、津田の終始一貫した態度であったので、少なくともその学問に傾倒したことのある氏ならば、常に一つのワクをもって物事に対し、そのワクを満すとか満さぬとかいう観点を去ることが必要ではないか。

このような一種のラベルづけとならんで、士族、大正期、満鉄調査室、司法当局等々の、ある身分、ある時期、ある機構等々に対し、常に一定の既成概念をもつてのぞみ、いろいろな事象をそれと直線的に結びつけて推断するという方法も、また氏の方法論の特色のように思われる。

さらにいえば、氏は、人はある時代の風潮の影響をうけることのみを強調して、その風潮を批判し、反撥することもあるという一面を看過している風がある。これらは、すべて津田がその学問研究上、常に排したところのものであることもつけ加えておこう。

筆者は、家永氏の「満鉄調査室出身の研究者津田が日本帝国主義という大前提を批判する力を養いえなかったのもむりないところであった」(367)などという叙述にふれ、とくにその感を深くしたのである。

四　すぐれた記紀研究の理解

家永氏は新著の第三編と第五編とを、津田の記紀研究の考察にあて、とくに前者においては、津田の記紀研究がどのような意図から出発し、いかなる方法論をとり、それがどのような結論を導き出し、それら成果がしめる学問的意義を、その時々時代と照応させつつ詳細に説明しておられる。また後者においては、津田の記紀研究が刑事事件として取上げられる経緯や、裁判中の争点となった諸点等を、公判記録や、津田の『上申書』等を資料として精細に描いている。

前者において、津田の記紀研究が江戸時代の諸学者や明治以後、津田にいたるまでの研究と、いかに異なるか、また津田が外国の書物から得た文化人類学や、神話学、民族学等々の新しい知識や方法論を、どのようにその研究に取

入れたかについても、一々資料にもとづいて跡づけている。津田における記紀研究の形成過程を明らかにした氏のこの部分の叙述は、それ自身立派な研究である。しかも津田が記紀の研究に入る基本的立場を、

上代の歴史も国家の起源も、現代人の理性のはたらきによって合理的に解釈せられねばならぬことである。徒らにそれを神秘にすることは、とりもなほさず、人に疑をもたせることであって、国民の精神生活にとってはそこに大きな危険が伏在することを忘れてはならぬ。(中略)学問上の研究によって現実の生活に於ける国民の情念とは、矛盾するものでも衝突するものでもないといふことである。(関与三郎氏旧蔵文書)

世にもし学問的研究によって真実を明らかにすることが尊主の情を妨げ国体觀念を動揺させるものであると考へ、学問的研究と尊王の情または国体觀念とを反対のものの如く思ふものがありますならば、それは大なる誤であると信じます。すべては真実の上に立たねばなりません。如何なる学問的批評に逢っても、聊かも動かない真実なる知識の上に立ってこそ、尊王も国体觀念も鞏固になるのであります。さうしてまた實際、皇室の尊嚴も国体觀念も学問的研究による真実の発見によってますます明かにせられいよ／＼強められてゐるのであります。

(第一審上申書)

等の、津田自身の手になる文章から明らかにし、氏自身も、一皇室に対し衷心から敬愛の情をいだいた津田が、記紀の記述の非史実性を強調しても、それは反天皇制思想家が、皇室の起源の科学的考察を通じてその權威を失墜させようとするのとは全く志向を異にしていた(25)といっている。そして戦後の創刊後間もない『世界』が、津田の「建国の事情と万世一系の思想」(昭和二十一年四月号)を掲載するに當り、津田の論旨が編集者の意図とそごし、かえ

って、それが敗戦直後のいわゆる反動陣営に利用されることを恐れた、編集者自身の苦心の長文を添えて発表されるにいたった経緯に対しても、『皇室擁護』は、青年時代以来の津田の一貫した立場であって、これを意外としたことは、津田の思想に対する大きな認識不足を示すものにほかならなかったのである」(445)ともいい、津田の立場に対する正しい理解を示している。

さらに津田の記紀研究の成果に対しても、それが①記紀の神代説話以下を史実の記録ではなく、上代人の思想の表現であるとしたこと、および②その説話の体系が大和朝廷の官人の政治目的による述作としたことなどを、津田の前人未踏の創見であるとし、③説話の「作為性」だけを強調するばかりでなく、作為の素材に民間伝承の類がふくまれているとする点を、高く評価している。とくに③については従来あまり注意されなかった点で、氏の深い理解を示すものである。

五 津田に対する曲解のはじまり

しかし家永氏の津田の記紀研究に対する、このような理解も評価も、同書の後半部においては「(津田の記紀批判は)天皇制に対して破壊的批判を企てたものでは決してなく、むしろ天皇制の精神的支柱の合理的編成による強化をめざして行なわれたものであることがきわめて明瞭に裏書きされている」(441)とか「天皇制の近代化合理主義化をはかったものであり、同時に政治を民主化し、天皇を政治の責任の衝から解放して、『国民的精神の生ける象徴』たらしめるのが津田の念願であった。(下略)」(446)というふうに変っている。津田のあくまでも真実を明らかにしようとした努力が閑却され、卑俗な意味での政治的努力として強調されているのである。

なお、津田が記紀研究の過程において、その第一作である『神代史の新しい研究』以後、外国の書物からの引用や、外国の神話との比較考察という方法を止めたのは事実である。しかし、それは記紀の神代の物語が、前述したように、後世の述作であり、説話であるとする、記紀の性格に対する根本的理解の当然の帰結であって、神代の物語がいわゆる神話でなく、述作された説話であるとする以上、外国の神話を対象とする神話学や比較神話学などを方法論として用いることができないのは当然である。したがって津田自身もその後の『神代史の研究』の例言に

著者は西洋の学者によって試みつゝある原始宗教や民間説話や又は所謂神話やの人類学的、社会学的もしくは心理学的研究から大なる裨益は得てあるが、さういふ一般的な学問の一部面もしくは一材料として神代史を取扱ふのも無ければ、それらの学者の種々の所説をもとにして、無雑作に、又は強ひて其の目で神代史を見ようとするものでも無い。

といい、その立場を明確にしたばかりでなく、柳田国男一派が精力的に開拓しつつあった、民俗学や民間伝承の研究等の成果も、これをその研究に取入れようとしなかった理由については、『上代日本の社会及び思想』の中で、「民俗に立脚するといひながら、実はそれを抽象的に取扱ひ、民俗の地方性、時代性を度外視し、或は其の歴史的变化もしくは発展を軽視乃至無視するやうなこと」や「山間僻地や海島の民俗が上代の民俗をそのまゝ伝へてあるとするのは誤り」であるとして、要するに「民俗や民間伝承の解釈が学問的方法によらない思ひつきであり、独断的なものであったならばそこに種々の無理が生ずる」と、明示している。（附言すれば、津田は柳田の著作には、よく眼を通しており、神社の起源などについては、とるべき説のあることを、筆者に注意したことがある）

このように対象とする記紀の物語の特殊性の故に取入れなかった、人類学的方法や、その学問的研究としてのあい

まいさのゆえに取入れなかった、日本の民俗学の成果について、家永氏は「結局はそれらの文化人類学的方向からの日本神話研究の動向ときびしい一線を画し、その独自の文献学的方法の内にてこもってしまったのである。それは、津田の記紀批判を鋭くする反面に細く狭いものとしたことも免れなかったばかりか、西洋の学問的方法の日本研究への積極的応用に努力した日本人学者の研究成果の活用之道をとざすことになり、それが（中略）唯物史観史学拒否の姿勢を強化するよび水ともなったように思われる」(260-1)といい、また、「読書を主たる研究手段とし、デスクワークにもっぱら力を注ぎ、書齋にとじこもって民衆との直接の接触の機会を進んでもとうとすることのとはしかった津田の研究方法、生活態度が、民俗学に深入りするのを妨げたという事情もあったにちがいない」(262)ともいっている。

前記の引用文中、氏のいう津田の「文献学的方法」については後にふれることとし、津田の前述したような研究態度が、「唯物史観史学拒否の姿勢を強化するよび水」となった、という氏の見解については一言せざるをえない。

六 唯物史観をめぐる

津田は前述のように民俗学を批判した後につづけて、「何事についても欧人によって形成せられた或る学説もしくは仮説を準拠とし、それにあてはめて概念的に事物を取扱おうとする傾のある、日本の学界の通弊の現はれでもある」といっているが、これは津田が先に訣別した人類学的不いし社会学的、心理学的研究ばかりでなく、唯物史観史学をもふくめて批判しているのであるから、津田が早くから唯物史観史学に批判的態度を持っていたことは事実である。しかし津田の唯物史観史学に対する批判は、家永氏のいうように、西欧人の前記研究法に対する批判がよび水

になったものではない。民俗学の学問的方法に対する疑問と批判とが、唯物史観史学についても、同じようにもたれた結果なのである。

家永氏の態度には、同書の後半部にいたるほど、唯物史観史学に対する評価を高めていく傾向があり、伊豆公夫らの『日本歴史教程』などを「戦前に出たものでもっとも科学的な日本古代史概説であったと言える」（394）ともいっている。氏はここでも科学的という言葉を用い、別に科学的史学という用語を用いているが、少なくともここにいる科学的という意味は、学問的とか、厳密な方法ということでないことは明瞭である。にもかかわらず唯物史観史学即科学的と称する氏の、学問に対する考え方はどういふものであろうか。さらに、唯物史観史学の成果を取入れなかったことが、津田の業績を偏狭なものにしたという見解は、唯物史観史学そのものをどのように考えているかを疑わしめる。なぜならば唯物史観史学は、特殊な政治的立場に立って、その理想とする政治や経済や社会の体制の成立が必然であるということを経史的に説明しようとするもので、その方法は学問的でも、さらには真の意味での科学的でもないからである。そういう特殊な立場や、その成果を歴史学に取り入れるということは、学問上の問題であるよりも、むしろ人生観や政治理想に関する問題である。さらにいえば、唯物史観史学の方法やその成果を部分的に取り入れるなどということはありうべからざることであり、ましてやそれによってある個人の歴史研究が補完されるというものではない。それを氏が「政治的イデオロギーないし世界観としてマルクス主義をトータルに受け入れるか入れないかにかかわらず、唯物史観史学を頭から拒否するかぎり、近代史学史の成果の上に立った日本史の科学的究明を十分に果しえなかったのは、必然の結果だったといわねばならない」（186）などというのをみると、唯物史観史学そのものに対する氏の見解を疑いたくなる。

七 津田は彈圧に屈したのか

津田の記紀研究が裁判に付された時、その争点となったものはいくつかあるが、最後まで争われ、結局有罪とされたのは、津田が、神武天皇以下仲哀天皇にいたるまでの御歴代の存在を疑わしいとした、という裁判所の見解である。裁判所が根拠とした津田の『古事記及日本書記の研究』（大正十三年刊）の該当箇所は

記紀の記載が、概していふと、ほぼ仲哀天皇と応神天皇との間あたりに於いて一界線を有することを示すものである。（中略）さうして応神天皇の朝に文字が伝へられ、記録の術も幼稚ながらそろそろ行はれ初めた、と想像せらるべき理由があるとすれば、此の事実もまた故なきことでは無からう。なほ今一つ是に關聯して述べて置くべきことは、年代のほぼ推知し得られるのは応神天皇以後である、といふことである。（中略）しかし、仲哀天皇以前の御歴代については、全く其の時代を知ることが出来ないといふより外は無からうと思ふ。（同書二三〇～二頁）と、

神武天皇から仲哀天皇までの物語に人間の行動と見なし難いことが多いのは、一つは之がためである。さうしてそれがほぼ仲哀天皇までであるのは、帝紀旧辞の編述せられた時に、御系譜だけでもほぼ知り得られたのは応神天皇より後のことであつて、それより前については記録も無く、其の頃の歴史事実が殆ど全く伝へられてゐなかつたといふことが、恰好の事情となつてゐるらしい。（同書四六六～九頁）などの叙述である。

しかし津田がここであつていふのは、仲哀天皇以前の御歴代については、その時代を知ることができないといふこ

とであり、記録の上から知り得るのも応神天皇以後の御歴代であるということである。したがって仲哀天皇以前の御歴代について疑問がもたれても、それは御歴代の存在を積極的に否定することとはちがう。津田が公判廷において、裁判長の「神武天皇カラ仲哀天皇マデノ御歴代ノ御存在ヲ疑ッテ居シタカ」の問いに対し、「疑ッテ居リマセヌ」と答え、「其ノ通り信ジテ居タノデスカ」の問いに、「サウデス」と答えているのは当然である。

家永氏は同書に以下の一問一答を仔細に引用しているが、ここでは紙幅を考慮して再録しない。ただ氏はこの時の津田の答弁をもって、「裁判上の技術として余儀ない手段であったとはいえ、学説のきわめて重要な点において苦しい弁解をしなければならなかったという後味の悪さがおそらくこの事件への真剣な検討から津田を回避させ、むしろその過程で生じた若干の後退が、戦後の大規模な思想的後退のいとぐちとさえなったとも見られる」(429)といい、あたかも津田が前説をくつがえし、公判の段階で仲哀天皇以前の御歴代の存在を肯定するにいたったかのような恣意な臆測をしている。細部は読者の直接の検討にまつ以外にないが、精緻な学問的検討の結果に成った一つの学説を、専門家ではない裁判長に納得させることの困難さは想像されることで、それは決して「苦しい弁解」ではなく、津田の前記引用を正確により、津田の意とするところを理解していれば、ともすれば生じやすい公判廷での議論の喰い違いに対し、津田がその所説を明確にしようとして努力していることが分るのである。しかるに氏は津田の答弁をもって裁判所に対する後退であるとし、「津田史学の思想的基礎が弁明の形で明瞭に浮かび出ているとともに、その戦後における転換の予告されていることもみのがせない」(411)とか、「戦後における客観的情勢の変化に先だって、すでにこのような事実の認められる事情は、この裁判が、津田の戦後における大きな変貌を生み出す遠因となったことを暗示しており、ある意味で弾圧の効果を一定の限度で実現させたと見ることも可能であろう」(410)などといって

いる。

これは氏が、津田が前記著作において、仲哀天皇以前の御歴代の存在を否定していた、という先入観（それが氏の先入観であることは、氏自身が後日、アンケート形式によってその先入観の正否を知友に質問しているのでも知られる。同書四〇三頁）と、裁判所が思想的弾圧の意図をもって、この事件ないし津田に対したという前提から生じたものである。

八 いわゆる司法弾圧をめぐって

戦後、この裁判事件に対し種々な評価があり、とくに、同事件をもって政府の学問弾圧とする意見が強いが、津田自身は「世間ではこの事件を官権の学問弾圧という風に言っているが、自分は少くともこれを官権の発意から出た弾圧とは思わない。事の起りは右翼といわれていた民間の一部の言論人の行動である。（中略）結局官権が右翼者流の言論に引づられたので、彼等が斯様に官権を動かしたのもあの当時の時勢である。つぎに予審判事、裁判長など司直の人々も自分には充分に理解ある態度を示して呉れた」（『嵐のなかの百年』七六頁）といっている。

津田はあくまでも自己の学説に対する裁判所の誤解を正し、学問的研究というものに対する、その蒙をひらくという態度に終始し、公判闘争とか政治闘争の場とは考えなかったのである。しかるに家永氏は、筆者の著書のまえがきからも引用し、「（筆者の）草稿に大逆事件裁判につき『弾圧』の語を用いている箇所に『司法部の弾圧とは不穩当！』という書入れを加え、筆者の再考を促した、という。これは、津田が司法弾圧の意味をついに理解できなかったことを何よりもよく立証している」といい、昭和七年ころ、すでに時の大審院長が司法官会同の席上、「弾圧」という言

葉を用いていたことをあげている。

津田が自己の裁判事件を、前述のように理解している以上、氏のこのような津田に対する批判は見解の相違とでもいうより他に仕方のないことである。また、大審院長が使用した弾圧という一語をもって、司法部全体の風潮とするには、歴史を考察する場合の態度として異論があろう。

なお、筆者にも関係あることなので、氏が引用した前後の文章を再録するとつぎの通りである。

話がたまたま大逆事件に及んだ時、先生は幸徳らに判決の下った日の夜、友人とそのことについて語り合った思い出を話され、世間には同事件を政府の捏造とする説もあるが、わが司法部には一種の伝統のあることを強調され、事件の真相は是非明らかにしておかねばならないといわれ、その部分に関する私の記述に、「事件に直接関係があったと思われる、多数の社会主義者の罪を問うたことは、心ある者から不当の弾圧と目せられたのである。」という一節があったのであるが、先生は鉛筆をもって「心ある者」のわきに「タレカ」と記され、「弾圧」の文字には傍線を附され、「司法部の弾圧とは不穩当?」と記されてあった。今も冷汗の流れる苦い思い出である。（拙著『日本の史潮』）

当時の筆者は、津田が常に真実のみを尊重し、真実の追求にひたすらであったのに対し、事実の不明な事柄に対し、軽率な断定を行なったことを戒められたものとして、それこそ文字通り苦い思い出として、これを記したまでである。

家永氏が同裁判において、津田が所説を枉げて後退したとか、それが戦後における津田の言論活動を予告したものである、としたことは前にもふれたが、戦時中における津田の沈黙に対しても「（それは）狂暴な迫害により他律的に

もたらされた事態であつたのに、津田がこの不幸な体験から深く日本の現実について学びとり、それを自らの思想と学問の前進のために役立たせるよう活用した形跡の認められない事実」を問題にしなければならない。(428)とか、

「津田個人にとってばかりでなく、日本国民の学問、理想の自由の破壊を促進するに大きな役割を演じた刑事弾圧の客観的意味がまったく認識されていない」(429)としているが、仮にあのような事件を契機に、前進される思想とか学問とかがあるとすれば、それはどのような思想や学問をさすのであろうか、筆者には疑問である。

裁判中の津田は帰宅すると、そのまま、戦後になって刊行された『論語と孔子の思想』の原稿を書きつづけていたという。(当時、岩波書店を代表して津田につきそわれた渡部良吉氏の談話)そうして前にも記したように、敗戦直後という情勢の急変の中にあつても、自己の所説と所信をそのままに発表し、世の風潮におもねることも、また迎合しようとしなかった、津田の態度こそが、筆者には在りたき学者の姿として映ずるのである。

なお、この項の最後に附言するならば、右の裁判中、岩波茂雄の斡旋で、昭和十六年の夏、久野収氏が羽仁五郎氏を訪ね、津田に対する、いわゆる公判における陳述戦術のコーチを依頼した時、「羽仁は、『自分は戦後には天皇擁護の津田史学とは真正面から衝突するから』と言ってはじめは避けていたが」(413)結局、一日、三人で津田の山荘に合い、熱心な助言を行なったことを記しているが、久野氏からの伝聞によるとはいえ、十六年の夏の段階における、羽仁氏の戦後云々という予言めいた言葉はいかなるものであろう。いうまでもなく、大東亜戦争の勃発は、その年の十二月であるからである。そうすると羽仁氏の誠意は疑えぬところであるとしても、「天皇制について津田と全く思想を異にすることを承知の上で誠意をもって津田を救う戦術を考え、津田の健康にまで配慮した羽仁のこのときの態度は異なる思想に立ちながらもフアシズムに対峙したたかう者としてのみごとな典型を示すものといわなけ

ればならぬ」(413)という感激的な叙述も、少しく色あせるのではなからうか。

九 戦後の津田の業績

家永氏の今度の書物の第六編「戦後の津田の思想の変貌」は分量にしてほぼ全体の四分の一強をしめ、氏がこの書物において、最もいわんとしたところであり、それだけに力をこめて書いているところである。すでにしばしば指摘したように、それまでの諸編は、いわばこの一編の序章のごときものであった。

そこで氏が指摘していることは、戦後の津田が戦前のように学問的な業績を世に出すことが少なく、もっぱら時事評論的な文章を数多く発表し、しかもそれらの文章において、反共主義をふりかざし、ほうはいたる民主化や革新的な風潮に対して絶えずブレーキの役割を果し、かつての国体論者や右翼の言論人と同じように、天皇や国体を讃美し、天皇中心主義に近い色彩をおびたということである。

たしかに津田が戦後新たに世に問うた専門分野での業績は、二十一年の『論語と孔子の思想』や、三十二年の『シナ佛教の研究』(その所収論文の半数が戦後発表のもの)および戦後世に出た『文字に現はれたる国民思想の研究』の第五卷等にすぎない。しかしそれらの業績をもってしても、氏が、津田との比較において称揚する柳田国男の、戦後における『海上の道』をふくむ業績に、まさるとも劣るものではなからう。さらに津田には、『国民思想の研究』をはじめとする、ほとんど全著作の改訂という大きな仕事があった。家永氏はこれらの改訂の仕事を「社会科学的思考の全面的放棄が、戦後の改訂の大きな特色といえるが、その結果、歴史上の事実を個人の心理に帰結させるにいたるのは免れない」(51)といつて、全くその価値を認めず、むしろ戦前の著作と改訂版とを比較対照することによって、津田の

思想的変貌を指摘するのみであるが、津田の改訂は決して単に言いまわしを変えるという、表現上のもではなく、新しい史料を加え、論理の誤りや考察の不備を補うなど、内容全体にわたる真の改訂であった。津田は公刊された自己の著作に絶えず書き込みを行ない、常に他日の改訂に備えていた。津田はひとたび発表した論文に対しては最後まで責任をもち、絶えず研究の結果を補い、その後生じた批判にも耐えられるものにしておかねばならない、といった。そのような津田の努力のあとは、刊行された『全集』の、編集者による「補記」によっても明らかである。

昭和二十八、九年のころであったが、津田を訪れた筆者に対し、いま『源氏物語』を読み直しているのだが、物語の面白さにひかれて、ついペンの運びがにぶる、といったようなことを笑いながら話したのを思い出す。これは津田が旧版の時とは自ら異なる今の思想で資料を読み直してみようとする、並々ならぬ津田の改訂の仕事を思わせるものである。

家永氏は例のように、津田の蔵書中、戦後発行された書物の数の少ないことを指摘して「反ソ反共宣伝文献を主とした僅少の書名が見られるにすぎない」（468）といているが、事実、筆者もそれらの書物が津田の周辺に積まれているのを見たことがある。しかしそれらはすべて著者もしくは発行所から津田に寄贈されたもので、またそのすべてに津田が眼を通したというものでもない。当時の津田は著者に『西国立志篇』の購入を依頼したり、必要な史料の蒐集にはきわめて熱心であった。津田の周辺の人々は、絶えず津田の求めに応じて多くの書物を大学図書館から運んだものである。家永氏のいう数多い津田の論評の類はそのような研究の傍において行なわれたものである。氏は前記の引用につづけて「戦後すでに時勢の動向への臭覚を失なった津田が、ろくろく勉強らしい勉強もせず、資料も事実認識もなしに始めた時事評論が上述のような内容のものに堕したのは必然の運命であった」（469）といているが、津

田の戦後における著しい評論活動はそのような思いつきの発言ではなかった。

一〇 津田は簗田の亡霊か

家永氏は津田の評論の数々を時代錯誤ないし反動という立場からのみ批判して、敗戦の直後において、いかに無法な言論が、革新や民主化の名の下に横行していたかを明らかにしていない。歴史の分野だけを見ても、『資本論』の一節を冒頭に掲げ、日本の歴史の展開が、いかにマルクスの所論に合致するかを実証するに汲々たる類の著作や論文がいかに多く、『書き改められるべき日本史』の名の下に記紀の記載を鵜呑みにして、歴代天皇の非道を暴露的に叙述した無責任な文章や非学問的著作がいかに多かったかは、いまだに筆者の記憶に鮮やかである。津田が憂えたのはそのような情勢であり、津田の意見を求める、当時の出版界の傾向とあいまって、津田には異例な評論活動となったのである。（氏も当時の津田の「愛国の熱情に深く胸をうたれた」⁴⁶⁹⁻⁹⁰といっている）

しかしそれら評論のすべては決して一時の思いつきではなく、津田の一生をかけた学問的研究の成果をふまえた所信に立ったもので、氏のいうような「政府与党の代弁」でも、それへの協力でもなかった。『ニホン人の思想的態度』や『日本の皇室』『歴史の扱ひ方』等に収められた、それら評論は戦後三十年に近い歳月をへた今日でも、その正しさと説得力とを失うものではない。他日、戦後の日本思想史が回顧されるとき、看過することのできない、特異なしかも孤高の思想である。

それを、家永氏は戦時中平泉に疎開した津田が、敗戦後も直ちに帰京せず、急速に進行する歴史の動態を的確に把握し、それに応じた適正な裁判を下す力を弱めてしまった（466）からであるとか、敗戦時すでに七十二才、逝去の時

八十八才であった津田の生理的年齢の故に帰そうとする（473）のであるが、何よりも戦後における津田の在り方を理解しない単純な臆測である。

さらに現行検定教科書の、いわゆる偏向を批判した、『子供に教える正しい日本史』に対し、津田が「現在、所謂進歩派の者に反対する者は反動だと片づける風があるが、馬鹿げた事だ。日本の歴史教科書は、日本人が日本をよくするために昔からいかに努力してきたかを中心として書かれなければならない。本書の批判は賛成である。（中略）日本人の道徳感情は立派なものだといふ事を、もっと強く云って欲しかった」という推薦の辞をおくったのに対し、氏は「津田の心情は、さながらかつて彼を陷害した箕田胸喜の亡霊が乗り移ったという印象さえ生じかねぬものがある」（473）といっているが、箕田らの言説のよって来るところと、津田のそれとを簡単に比較しただけでも、そのような表現がいかに不当、無責任なものであるかが知られる。

一一 新旧両版の比較

家永氏は津田の戦後の思想的变化というものを総括するかのように、その末尾に、津田の著作の旧版と戦後の改訂版とを、一八〇余頁にわたって比較対照している。それはたしかに有意義な作業であり、その払われた努力には敬意を表するにやぶさかではない。しかしその比較対照が後述するように、氏の観点からだけ行なわれ、新たに書き加えられた部分に対する評価は全く行なわれていない欠点がある。『国民思想の研究』第一巻にしても、冒頭の「上代国民生活の瞥見」は旧版の一七頁に対し、新版のそれは二九頁になっているが、それは単なる分量だけの問題ではなく、考察はさらに精緻さを加え、戦後新たに問題となった、皇室の特殊性や、支配関係の問題に対しても、学問的に

解明している点が多い。煩をいとわず、読者の公正な判断の資料ともなるであろうから、武士の発生に関する叙述を二つの版について対照してみよう。旧版においては

地方は殆ど無政府無秩序の状態となつて、農民は流離困頓して多数の浮浪人がその間から現はれ、奸臣盜賊は到る所に横行するといふ有様になつた。従つて国司なども多数の従者を養つて、護衛ともし手さきともしなければならなくなつた。さうして任期満ちた国司などが土着して、在任中に扶植した勢力を基礎として、益々威力を振ふものもある。地方民中の資力もあり才幹あるものも、同じやうな態度を取るやうになる。これらの豪族が多くの土地人民を占有し、多くの郎等を糾合して、弓矢の力で互に勢力を争ふやうになる。それが即ち一般に武士と称せられるものである。

此の郎等がどうしてできたかといふことは綿密な研究を要する問題であるが、当時の状態から臆測すると、其中には宿衛をつとめて、あばれ癖のついたものもあり、生活に窮して本地を離れた浮浪人もあり、或は盜賊になりかねないものも、少なからず交つてゐたであらうと思はれる。要するに、ならず者、あふれ者どもが多かつたのであらう。

とあるのに対し、改訂版においては

武士は、地方的豪族、土着したものと国司、荘園の荘司、またところによつては村落の首長、などが、或は国司などの従者であつたもの、或は宿衛や貴族の帳内資人などをつとめ、または時々行はれた兵役に徴発せられてあばれ癖のついたもの、また或は生活に窮して本地を離れたもの、などを用ゐ、境遇によつては盜賊となりかねないやうなものさへ加へて、それを糾合し、或は部内の農民、特にその間の功名心あり野心あり浮浪性を帯びたものなどを

率ゐ、さうしてそれらの首領となり、種々の形に於いてのそれぞれの集團をなし、弓馬を用ゐて何等かの行動をとる習癖がいつとなく生じたことによつて、形づくられたものらしい。さうしてかういふ集團が生ずるとその間におのづから勢力の争が起り、それがまたますますこの習癖を長ぜしめたであらう。その集團が、時の経つに従つて首領とそれに隸属するものとの間に次第に結ばれてゆく主従の關係を枢軸とし、土地またはその他の生活の資を与へまた与へられることによつて、成立してゐたことが考へられ、場合によってはかかる關係が階層的に縦に重なつてゐると共に種々の事情による相互の間の横の連絡が生じたことも、また推測し得られよう。豪族が源氏なり平氏なり藤原氏なりの系統のもの、またはこれらの家の氏を冒してゐるものである場合には、特にかういふことが多かったやうである。現在の国司もまたかかるものを利用する場合もあり、その従者にも弓馬に長じて主人との間に同じやうな關係を結ぶものがあつたらしい。

とある。両者を比較してみると単なる分量だけの問題ではなく、旧版にもまして多方面から武士の發生を考察し、しかもそれが一つの階層をなし、やがて政治的勢力に成長していく前段階として、人間の性情に対する深い理解と考察力とをもつて描かれている。そのような武士の間の思想についても、あるいはそのような武士によつて作られる新しい政治体制についても、綿密な考察がつづくのである。しかもそれらを律令体制の崩壊とのみ見る従来の所説に対しては、国情に合わない、外国の制度を模倣したのみの制度を克服していく、日本人の生活力の表われとする、津田の見解には、歴史を絶えず推移し展開していく過程において捉えるという、すぐれた考察力が示されているのである。

一一 「内面的理解」と「文献学的方法」

かつて家永氏も、このような津田の多面的な、しかも人間の性情にまで立入った考察の卓越性をまとめ、桑原武夫氏が、津田の批判精神のみを強調した理解を示した時は、それが津田の著作の読み方としては一面的であるといい、「この書『国民思想の研究』」が強烈な批判的精神にみちた啓蒙の書であると同時に、深い内面的理解力を駆使して、かえって従来見落されてきた面に豊かな同情を注いだ史書であるという点を見落すならば本書の読み方としては決して十全ではない」（106）とも、また、「この書の局部局部に目を奪われず全編を総合的にとらえるならば、この書が常に対象を積極面と消極面との両側から評価する行届いた配慮に欠けていないことが確かめられるのである。（中略）単なる机上の読書によって概念的知識を蓄積しているだけの書齋学者の及びがたい能力が発揮されているのであり青年時代の津田の知的人間的体験の最大限に活かされているのを見るべきであろう」（111）といい、「その理解のし方には津田の独創力がよく現われている。とにかく、津田が日本の古典に対して、深い内面的理解と温い同情とをよせていたことはまちがいない、その鋭利な批判精神の面のみで津田の思想史を特色づけてしまうことの適切でないのは、これによって十分に明らかにされたと思う」（120）といっている。

ここで指摘しておきたいことは、家永氏が再度にわたっている、津田の考察における「内面的理解」ということである。氏のいう、その意味は必ずしも明瞭ではないが、少なくともそれは前に指摘したことのある、津田をもって「文献学的方法」と同じこもる、といった批判と矛盾しないかということである。その矛盾は氏が津田の研究方法を「文献学的方法」と規定するところから生ずるものである。津田が過去の事実の究明にあたって用いた史料は、主と

して文献である。しかし津田の方法が単なる「文献学的方法」という言葉で律しきれないのは、常に文献そのものの正確な理解と考証と平行して、いつ、いかなる事情の下に、何人によって記され、その後それらが他の人々により、いかに受取られ、また一面において、それらが後世にいかなる影響を及ぼしたか、という点の考察が行なわれているからである。これこそが一つには氏のいう「内面的理解」なのではないか。

むすび

家永氏も津田の業績や、その研究方法の特殊性については、右のように深い理解を示しているにもかかわらず、それが戦後の津田の、氏のいう変貌なり、それにいたる経過と称するものを批判する場合には、文献学的方法という一語をもって単純に割切ってしまうのである。そうして氏は、改訂版における特色を、津田が戦後になって、①皇室や天皇讚美の語句を附加して、天皇中心主義に近い色彩をおびたこと、②階級や革命の用語を廃止したこと、③日本における階級闘争および革命思想の存在を否認した、ことなどにあるとしている。その結果、戦後の津田を「戦前のいわゆる国体論者の演じた役割を継承するにひとしい」(448)とか、「全て戦前の正統的国体論者の史観とかわるところのない言説」(449)「彼自身のライフワークの意義を自ら否定するに等しい主張」(449)「往年のおのれの心血を注いだ研究の意義を空無に帰せしめるにちかい心境」(450)等の言葉で批判し、それは「思想家津田と右翼思想家との間のミュンヘン協定の締結」(557)であったとさえいう。そうして津田のそのような変貌が主として「津田の基本的立場に大きな変化が生じたこと」(437)に帰しているが、果して津田はその基本的立場に変化を生じたのであろうか。津田は前述した『世界』の場合に比べると同じように、戦前と同じ一貫した立場を維持しつづけたのである。勿

論、自己の所説や所信に反する主張や風潮に対しては、その基本的立場に立って、従来の所説の足りないところを補い、時にアクセントを強めることはあっても、それは学問なり言説なりが、その人の思想や人生を生きる姿勢と切離されるべきでないことから当然であって、そのような変化を変節ともとれるような言葉で評すべきではない。なお前述した革命、階級の用語の廃止の例として、氏があげているのは、旧版に「歴史は畢竟自己革命の過程である」とあったのが、改訂版において「歴史は畢竟断えず自己を新しくしてゆく過程である」となり「文化の沈滞した——世に歌の革命が起らないのは怪しむに足らぬ」の「革命」が「革新」となり、「或る階級」が「或る地位をもっているもの」となり、「階級的の」が「地位による」となった類をさすのである。これは「革命」や「階級」の語が、今日行なわれているような特殊の意味をもたない以前において、それぞれ革新的とか身分と同義に用いられていたことを思えば当然の改訂であり、津田の反動性の例証とはならない。③の階級闘争以下についても、津田はすでに戦前に発表した「大化改新の研究」において、それが社会改革ではなく、単なる政治改革にすぎないことを明らかにし、従来、ヤツコ即奴隸として、奴隸解放のように主張する、改新の性格の誤りを正しているのである。

また改訂版における津田の表現の変化も、しばしば眼につくが、それも若いころの表現が、七十才をこえた後までも、そのまま用いられているとすれば、それこそ不自然なことで、それは学説上の問題ではない。

最初に記したように、家永氏は戦前の津田の業績に対してはかなり深い理解を示し、高い評価を与え、戦後比較的早い時期に書かれた氏の論文には、それが素直に表現されている。しかるに津田の戦後の業績についてのべる時、比較的最近に書かれたと思われる論文においては、前説と所々において矛盾を来しながら、津田の変貌や反動性を批判して止まない傾向がある。一体変貌したのは誰なのかと疑いつつ、それにつけても、昨今の家永氏の研究室外での活

躍が腦裏をかすめてならない。

津田の中国觀、朝鮮觀、明治維新觀等々についても、なお記したいことがあるのであるが、紙幅の関係で割愛せざるを得ない。最後に津田の歴史家としての態度、しかもそれが終始一貫したものであったことを示す文章を、津田の日記（明治三十年一月十九日、津田二十五才の時）から引用してこの稿を終りたい。

歴史家は精緻明瞭なる哲學的眼光を有すると共に、美妙壯嚴なる詩的構想を具へざるべからず。史實を判斷するに當りては不偏不党にして冷なる理性を以てするを要すると共に、其の眞実なりとせられたる人物事件に關しては溢るばかりの溫き同情を注がざるべからず。社会の表面にあらはれたる事實の眞相を描寫すると共に、裏面に潛伏せる人心思想の隱微を觀破せざるべからず。國勢變轉の形勢を敘述すると共に、人情及び理想の推移を注視するを要す。